# 文芸

## 俳句

無言劇観てゐるやうな冬木立　池田　逸子

冬凧に波の秀やさし九十九里　伊藤　敬子

無縁仏台座の割れ目下萌える　今関満喜子

初鏡年毎似てくる母の顔　魚地　照子

シンホニー聞こえて来そう冬銀河　江森　悦子

鍬始め幾祖の名残柄の細り　川島　孝夫

ほろ苦き八十年や蕗の薹　川島　通則

龍一字力一ぱい筆初め　向後　寛

喋りつつ幼は眠る春炬燵　越川せつ子

むっくりと無垢の浅黄や蕗の薹　越川　福子

短冊の墨を乱して寒新た　小松　藤男

荒磯や初日斜めに智恵子の碑　佐瀬　輝夫

沈黙のままにふくらむ蕗のたう　椎名万里子

葉隠れにちょっぴり顔出す蕗の薹　鈴木とし子

蕗の薹遠き日の事沸ふつと　鈴木　利子

節分や豆をまく人ひろふ人　玉虫　栗扇

蕗味噌や遠き思い出母の味　土屋美枝子

真っ青なレンズのやうに冴える空　土屋　義昭

地震に耐え余寒に耐えて九十九里　戸村　靜華

夕日受け土手でみつけし蕗の薹　内藤　くに

病床に絵手紙届く蕗のとう　西崎さち子

万両や朝日を受けて深紅なり　早川　勇

## 短歌

ひかりネギ我が子のごとき育てしも
値段の安きにしばしためらふ　越川　義則

上空の寒波は去らず明日もまた
達磨マークの北の地想う　高梨　キヨ

診察日「よろしいですよ」と云う医師の
血圧計る手のあたたかし　土屋　好

ほろ苦き蕗味噌母の在りし日を
偲ぶ味なり妻の手料理　伊藤　定男

私たち夫婦になりて六十年
長く思えど過ぎれば短し　鈴木　益郎

灰色の雲広がれるがに群雀
一斉に空へ飛び立ちゆけり　八角　三枝

生前の夫の仕事を引き継ぎて
木木よ芽吹けと寒肥施す　鈴木まさ子

駆け抜けし寒中マラソン足跡に
しっかと踏みしむ一つがありぬ　西山満里子

ゆっくりと歩きくれしが長身の
息子の歩幅に少し汗ばむ　田崎　尚美

母親に温く抱かれをさな子は
心解れて帰りゆきたり　押尾　輝子

末枯れたる広葉を纏ひ蕗の薹
摘み取る程に育ちておりぬ　青木　秀子

ふた七日過ぎたる亡姉を訪ひて
優しかりしと涙あふるる　平山　芳子

蛇口より迸し出づる凍て水は
雪の山河を越えて来しらむ　芹川　初子

亡き夫がこよなく愛でて育てたる
蠟梅咲けり黄も鮮やかに　吉岡　信子

冬至の日過ぎしも夜明けの遅るるを
夫の出勤見送りて知る　島田ますみ

独り居の老い憩へませと月一度
福寿の会を開きくれます　斉藤つね子

## こうほう博物館 48

# 室町時代の硯（すずり）

文字は人類の発明上、最高のものと言われ、情報を伝えるだけでなく、人間の意志や感情、行動の記録を表すことができ、それを後世に残すことができる唯一のものです。

日本への漢字の伝来は、今から二千年ほど前の弥生時代と言われます。古墳時代になると、自らも文字を使うようになり、さまざまなものに文字が残されています。奈良時代になると漢字は広く普及するようになり、庶民が使うような土器にも漢字が書かれたり、書道具が多く出土するようになります。そして平安時代には、漢字から日本語に合わせた文字ーカナが発明されたことによって、日本語を自由に表記できるようになり、あの有名な「源氏物語」や「枕草子」が生まれたとも言われます。

下の写真は、篠本城跡から出土した硯で、半分に欠けていますが、その残る陸の部分の中央は、ひどくへこんでいます。これは、墨を磨るのに使いこまれた証拠と言え、篠本城の住人は、よく書をしたということが考えられます。当時の書はほとんど残っていませんが、篠本城跡ではわずかにカワラケに書かれた文字資料が出土しました。

今月三日(土)から図書館二階町民ギャラリーで、墨蹟（ぼくせき）の世界展を開きます。現代の書をはじめ、町内出土の古代の文字資料や書道具、文房四宝と呼ばれる書道具を展示しますので、書のおもしろさ、奥の深さを実感してください。

▲篠本城跡から出土した硯